様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ９ 月 １３ 日現在

機関番号：３０１２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１３３１

研究課題名（和文）クリッカーを活用した幼稚園教師の行動観察力の可視化による力量形成

研究課題名（英文）Creating competency through visualization of behavior observation skills of kindergarten teachers using clickers

研究代表者
後藤　守（Gotoh, Mamoru）

北海道文教大学・人間科学部・教授

研究者番号：００００２４７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は学校現場において重要な課題の1つである「かかわり行動に困難をきたす子どもたち」に対する教師の力の1つとして「行動観察力」に着目した。ここでは、幼稚園教師の行動観察力として、「関係的視点から子どもの行動を捉える力」と「子どもの行動を流れのなかで捉える力」の2点を重視した。
　第１次研究では、「幼稚園教師の行動観察力」をクリッカーを用いた可視化資料から読み取ることに努めた。
　第2次研究では、保育現場を視野に入れた4つの研究として進めた。それらは、保育者と熟達者との比較分析がなされ、その結果、保育者群はエピソード重視型の傾向にあるのに対して、熟達者は文脈重視型であることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：This research looks at behavior observation skills as teacher skills for children with attending difficulties, an important challenge in school settings. Here, two points are focused on as behavior observation skills of kindergarten teachers: ability to grasp behavior of children from a relational perspective, and ability to grasp child behavior within the overall flow.
In the primary research, efforts were made to read off the behavior observation skills of kindergarten teachers from visualization materials using clickers. The secondary research was carried out as four studies taking the day care setting into account. Thus, a comparative analysis was conducted between day care workers and experts, and as a result it was shown that the day care worker group tends to be episode focused, while the experts tend to be context focused.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：行動観察力　保育者支援　クリッカー　ペンギンメソッド　可視化グラフ　インクルーシブな保育　母親アドバイザー　教育支援

１．研究開始当初の背景

我が国の教育の大きな動きの一つとして，特殊教育から特別支援教育への大きな転換が進められている。この動きには，支援の対象に学習障害や広汎性多動性障害のある子どもたちが新たに加わったということもさることながら，これらの子ども達が在籍している通常学級の在り方,強いては,学校教育そのものの在り方について検討を深めることが求められている。このことは,通常学級の教員をはじめとして，特別支援学校教員に対してもこれまでの障害児教育の考えを再構築するための研修の必要性が指摘されている。このことは同時にまた,就学前の教育を担う幼稚園教師においても同様に求められている課題であると考える。

このような特別支援教育の新たな視点が幼稚園の保育実践の場においても求められてきている現状においては,子どもの発達支援にかかわる幼稚園教師は,援助を必要としているこれらの子ども達の抱えている課題に対する適切な対応ができる力量を併せ持つことが求められている。

本研究では，特に，対人関係・対物関係面に困難さをもつ子ども達に対する支援の方法とその方法に基づく有効なふり返りの手立ての学習の重要性に着目している。このことにかかわって，我々は対人関係・対物関係面に困難さをもつ子ども達に対する支援の手立てとして,「関係力育成プログラム」を開発し,その実践を進めてきている。これらの実践をさらに内容のあるものにしていくためには，実践の省察（ふり返り）の仕方が重要であると考える。

研究代表者の後藤はこれまで，特別支援教育の対象児童に対する集団指導の実践とビデオ映像を用いた行動分析の研究を重ね,北海道教育大学大学院の現職教員院生の教育指導を行ってきた。これまでの教育指導では，写真やビデオ映像とその文章化をふり返りの素材としてきたが，熟練教員の実践における微妙なニュアンスを十分有効に活用しきれていない状況にあり，テクノロジーの活用にいま一つ課題が残されている。このことから，テクノロジーを活用した観察力の可視化を通して，有効な教育実践情報のフィードバックシステムを構築し，有効な省察（ふり返り）の方法を開発することが急務の課題と考えた。その研究の第 1 段階として，平成 23 年度から開始した「教職志望学生の行動観察力の可視化による力量形成」の研究では，有効な経験知を蓄積させるために，教職志望の学生を対象に方法論的な研究に着手した（科研費研究 23～25 年度)。そこでは，学生自身が参加したロールプレィ場面を対象にクリッカーを用いて可視化グラフ資料を作成し，そのグラフから,ふり返りのポイントを抽出した。そのポイントのビデオ映像の再生を通して,学生自身が主体的に振り返る手がかりを提供している。この研究において導入したテクノロジーは，中島が開発した，高等教育機関における授業のふり返りシステムをベースにしている。

本研究では,これまでの研究をベースに,インクルーシブ教育を目指す幼稚園教師の実践を対象にクリッカーを用いて可視化し,その可視化グラフの特徴的な部分と対応するビデオ映像の再生を通してふり返りをし,その実践について質的検討を進めていく。この研究の取組を通して，研究対象の附属幼稚園の教師たちの「行動観察力」の力量形成のプロセスを明らかにする。

２．研究の目的

本研究は,保育現場において喫緊な課題の一つである「かかわり行動に困難をきたす子ども達に対する教師の適切な対応を支える力量」の 1 つとして「行動観察力」に着目し，幼稚園教師にこの力量を形成させ

ることを目的にする。ここでは，テクノロジーを活用して幼稚園教師の「行動観察力」を可視化させ，そのふり返りを通して，インクルーシブ教育を目指す幼稚園教師の行動観察力を上げていくための方法論的検討をする。この研究の精度を上げるために，ニュージーランドのプレイセンターでの実践及び，中島　平（東北大学教育情報学研究部）が開発した「(PF-NOTE プロトタイプ)」による研究知見を活用する。

３．研究の方法

１）研究計画：幼稚園教師達の行動観察力を高めさせるために，テクノロジーを導入して，幼稚園教師達の行動観察力を可視化したグラフを作成する。同時に，その資料によるふり返りの機会を 3 年間に渡って設定する。また，熟達者達の可視化グラフ資料と比較検討していく。

２）研究の方法：F 幼稚園の教師達を対象に，保育指導場面を録画したＶＴＲ資料を「反応収集装置（PF-NOTE プロトタイプ）」を用いて分析し，教師達の行動観察力の可視化グラフ資料を継続的に作成する。それらの資料を用いて，その都度，ふり返りを進める。また，同一のＶＴＲ資料を用いて，1～2 年後に，再度，ふり返りを実施し，可視化グラフ資料の，差異及び一致について比較分析をし，幼稚園教師達の行動観察力の深まりを検討する。同様の手順で熟達者との比較分析を行い，幼稚園教師の行動観察力の力量形成のプロセスを明らかにする。

① 26 年度の研究計画（第 1 次研究）

ｉ）第 1 次研究の目的：テクノロジーを導入した可視化資料を用いて，インクルーシブ教育を目指す附属幼稚園教師達の行動観察力を高めさせることを目的とする。ここでは PF-NOTE プロトタイプを用いて「興味深い場面」と「検討の必要ありの場面」の分析を行い，可視化グラフを作成する。この可視化グラフを用いて「指導のふり返り」をし，なぜ，その場面が「興味深い場面」や「検討の必要ありの場面」なのかを，対応するビデオ映像を視聴したあとでその理由をふり返りシートに記入し，縦断的に資料の収集を行うことを目的にする。あわせて，熟達者の可視化グラフとの差異の比較検討の場を設定し，ふり返りの有効性を高める工夫をする。

ii）関係力育成場面の設定：本研究で分析の対象になる指導場面は，われわれが開発した関係力育成プログラムによるものである。このプログラムはコミュニケーション障害児のために開発された指導法で，次の２つの柱から構成されている。その一つは「自由度の高い場において，時間と空間を他者と共有すること」であり，もう一つは「生き生きとした子ども達の行動を引き出す応答的環境の構築」である。これらの視点設定には，「状況と折り合わせながら，自分の判断で行動できる力」を育成していくという共生社会への理解が背景にある。

iii）幼稚園教師の行動観察力：本研究でねらいとする，幼稚園教師の行動観察力は次の２点に集約される。その１つは，集団の動きや子どもの行動を「流れの中でとらえる力」である。もう１つは，こどもの行動を指導者との関係，子ども同士の関係，物との関係など，「関係的視点から捉える力」としてまとめることができる。

iv）研究対象：F 幼稚園教師及び園児（認定された障害児を含む）

ｖ）テクノロジーを導入したふり返りの方法：本研究では，中島が開発した，新しい反応収集装置を活用する（レスポンスアナライザによるリアルタイムフィードバックと授業映像の統合による授業改善．日本教育工学会論文誌（2008））。

vi）結果のまとめ方：幼稚園教師達に，PF-NOTE プロトタイプ（クリッカー）を持ってもらい，かかわり行動に困難をきた

している特定の子どもを対象に，その子どものかかわり行動について評価スケール（たとえば，集団全体の流れに乗れている場面）に合わせてクリッカーのボタンを押してもらう。そうすると，誰がどのボタンを押したかの情報が記録される。この装置では，ボタンが押された情報を，現場で撮影していたビデオ映像の時系列情報に加えることができ，ボタンを押した幼稚園教師と熟達者との判断の違いを比較することができる。このことによって，組織的なふり返りを行う討論のポイントが析出できる。

② 27 年度以降の研究計画（第 2 次研究）

ｉ）平成 27 年度以降の資料の収集及び可視化グラフによるふり返りの実施

平成 26 年度と同様に，27 年度以降にも同様の手続きで，ＶＴＲを用いて，可視化資料の収集を行い，併せて，それらの資料に基づいて，クリッカー（PF-NOTE プロトタイプ）による可視化グラフを作成し，ふり返りを実施する。

ii）平成 26 年度に収集した可視化グラフ資料の比較分析

第２次研究（平成 27 年度以降）では第１次研究で用いたＶＴＲ資料を用いて，再度，可視化グラフ資料を作成し，その可視化グラフ資料の特徴的な部分（グラフが大きな山になっているところ）のビデオ映像を視聴後，どうしてその場面が大きな山になっているのかについて，その理由をふり返りシートに記入してもらい，すでに分析している前年度（平成 26 年度）の結果との比較検討をする。さらに，熟達者達の可視化資料との比較分析を実施する。

iii）研究成果のまとめ：2 カ年間の収集した資料に基づいて論文を執筆し，学会誌等に投稿する。

４．研究成果

１）26 年度の第１次研究の成果

平成 26 年度の第 1 次研究では, 学校現場において重要な課題の１つである「かかわり行動に困難をきたす子ども達に対する教師の適切な対応を支える力」として「行動観察力」に着目した。ここでは，インクルーシブ教育を目指す特定の幼稚園を１園，抽出して研究協力園とし，保育場面を VTR 録画した資料を視聴させ，その後，引き続き「興味深い場面」と「検討の必要性ありの場面」クリッカーを用いて抽出させ，可視化グラフを作成させた。この可視化グラフは対応する映像とリンクされており，即座に, 場面のふり返りが可能となっている。

第１次研究では文教ペンギンルームでの保育実践場面の VTR 資料を用いて，研究対象幼稚園の教師たちの「行動観察力」の特徴を把握することに努めた。文教ペンギンルームの保育実践は地域に開放有れた「子育て支援」の活動として位置付けられており，文教ペンギンルームの専任スタッフによって開発された「文教ペンギンメソッド（関係力育成プログラム)」をベースにして進められている。本研究のねらいとする幼稚園教師の行動観察力はこの指導法の主要なコンセプトとして設定されている「関係的な視点から子どもの行動を捉える力」と「子どもの行動を流れのなかで捉える力」の 2 点から支えられている。第１次研究では，この 2 つの力が内包された「幼稚園教師の行動観察力」についてクリッカーを用いて，可視化資料からよみとることに努めた。第１次研究の成果については「幼稚園教師の行動観察力の可視化に関する研究－科研費による研究推進のためのパイロットスタディ－（コミュニケーション障害研究第 15 号，2014)」）にまとめられた。また，これと並行させてニュージーランドのプレイセンター，及びインクルーシブ教育に関する研究資料の収集を行った。

2）27 年度第 2 次研究の成果

平成 27 年度の第 2 次研究の成果は，次の 4 つに整理される。①ICT の活用に関する研究：北海道こども学会研究誌「こどもロジー」に，「ICT を活用したこれからの保育実践研究．－クリッカーを活用した『ペンギンメソッド』の研究を素材にして－」を査読論文として投稿し，採択された。ここでは，われわれが取り組んできた保育・教育実践研究を通して，より高度な教育的実践知を生み出す土壌が生まれている経緯を提示し，ICT を活用したこれからの保育実践研究のあり方を浮き彫りにした。②インクルーシブな保育に関する研究：北海道児童青年精神保健学会研究誌に「インクルーシブな保育の実践者における行動観察力の可視化．－ 熟達者の行動観察力の可視化資料との比較分析を通して－」として発表した。ここでは，保育者群と熟達者との比較分析をした。その結果，保育者群には，エピソード中心型の行動観察特徴が示され，熟達者には，文脈重視型の特徴が示された。両者の特徴が相補性を持ちながら，どのようにして，1 つの方向に収斂していくかが，今後の課題として明らかになった。③教育支援プログラムの分析評価に関する研究：この研究は，北海道文教大学研究紀要の査読論文として採択され，「子育て教育支援プログラムの分析法の探求．－関係力育成プログラムと PF-NOTE プロトタイプの活用を通して」にまとめられた。④インクルーシブな保育環境に関する研究：本研究のキーワードである「インクルーシブな保育環境」について，へき地保育所を対象に，調査資料を収集し，インクルーシブな保育環境を構築していくための手がかりがこれらのへき地保育所の持つ特性の中に含まれていることを明らかにした。

３)28 年度第 2 次研究の成果

平成 28 年度第 2 次研究の成果は 3 つに大別される。

（1）クリッカーの活用した「保育者支援」に関する研究：ここでは，これまでの研究を発展させて，①クリッカーを活用した保育者支援に関する方法論的検討の試み（本学紀要第 41 号），②これからのインクルーシブな保育実践に求められる行動観察力（東北・北海道心理学会第 12 大会），③ICT を活用した保育者支援に関する方法論的検討（日本保育者養成教育学会第 1 回大会），④クリッカーを活用した授業開発に関する研究（北海道文教大学研究紀要第 41 号）として発表した。

(2) 文教ペンギンルームにおける母親アドバイザーとの関連研究：この研究は，母親アドバイザーを活用した母性看護学実習プログラム開発として，コミュニケーション障害研究第 16 号に発表した。

（3） インクルーシブ保育に求められる保育者の特性については，日本発達心理学会 28 回大会で発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　12　件）

① 川端愛子・小田進一・後藤守他：幼稚園教師の行動観察力の可視化に関する研究－科研費による研究推進のためのパイロットスタディ－．コミュニケーション障害研究 第 15 号, 23-36（査読論文）．2014.11.

② 西野美穂・川端愛子・小田進一・後藤守：クリッカーを活用したピアノ初心者の技術習得に関する研究．北海道文教大学論集第 16 号,151-161,2015.3.

③ 後藤広太郎・川端愛子・後藤守：教職志望学生から見た「学級経営上の困難さ」のイメージ．学校臨床心理学研究第 12 号（北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻紀要），23-33,2015.3.

④ 小田進一・川端愛子・後藤　守：ICT を活用したこれからの保育実践研究- クリッカーを活用した「ペンギンメソッド」の研究を素材にして-.子どもロジー，（査読論文）113-119,2015,9.

⑤ 川端愛子：インクルーシブな保育の実践者における行動観察力の可視化－熟達者の行動観察力の可視化資料との比較分析を通して－．北海道児童青年精神保健学会研究誌第 29 号（査読論文），38－46. 2015，12.

⑥ 後藤守・川端愛子・後藤広太郎：へき地保育所におけるインクルーシブな保育環境に関する研究- 気になる子どもを取り巻く保育の場と構成メンバーの分析を通してー．北海道文教大学研究紀要第 40 号（査読論文）,41-54,2016.

⑦ 川端愛子・後藤守他：母親アドバイザーを活用した母性看護学実習プログラム開発. コミュニケーション障害研究第 16 号,（査読論文）33-44,2016.

⑧ 川端愛子：子育て・教育支援プログラムの評価法の探求－関係力育成プログラムと PF‐NOTE プロトタイプの活用を通して－．北海道文教大学研究紀要第 40 号,（査読論文）15-28.2016.

⑨ 高木俊明・後藤広太郎・後藤守：アクティブラーニングに関する実践的研究- G 教授と学生とのコミュニケーション構造と諸要因との関連- ．コミュニケーション障害研究第 16 号，15-28,2016.

⑩ 小塀ゆかり・川端愛子・多賀昌江・片倉裕子・後藤守他：ICT を活用した母性看護プログラム開発- クリッカーを活用した「文教ペンギンメソッド」のふり返りをベースにして- ．北海道文教大学研究紀要第 41 号，119-130,2017.

⑪ 川端愛子・和島真里・片倉裕子・後藤　守他：クリッカーを活用した保育支援に関する方法論的検討の試みー行動観察力の可視化の視点からー．北海道文教大学研究紀要第 41 号，51-57,2017.

⑫ 西野美穂・川端愛子・後藤守：クリッカーを活用した授業開発に関する研究-「表現Ⅰ幼児音楽２」の授業におけるピアノ初心者の可視化グラフの検討を中心にして－．北海道文教大学論集第 18 号, 59-65,2017.

〔学会発表〕（計 10 件）

① 川端愛子・小西悦子・小田進一・後藤守: 関係力育成プログラムを支えるバックグラウンド・ミュージック－クリッカーを活用した幼稚園教師の可視化資料を通した BGM の特性分析－．北海道心理学会第 61 回大会（小樽商科大学),北海道心理学研究第 37 号,2014. 11.

② 後藤広太郎・川端　愛子・後藤　守：「文教ペンギンメソッド」による子育て支援. 日本福祉心理学会第 12 回大会論文集（東京家政大学）．2014.12.

③ 川端 愛子 ・後藤　守・植木 克美：子育て支援活動の場を通した学生支援の試み. 日本発達心理学会第 26 回大会論文集（東京大学），2015.3.

④ 後藤　守・川端愛子・小田進一・小西悦子：クリッカーを活用した幼稚園教師の行動観察力の可視化　－学生たちの保育支援場面のビデオ分析を通して－．日本発達心理学会第 26 回大会論文集（東京大学）．2015.3.

⑤ 川端愛子・小田進一・植木克美・後藤守：クリッカーを活用した幼稚園教師の行動観察力の可視化(Ⅱ)．日本教育心理学会総会第 57 回大会論文集(新潟大学),2015.8

⑥ 後藤守・川端愛子・小塀ゆかり・多賀昌江・片倉裕子・中島　平：クリッカーを活用した北海道文教大学における「母性看護学実習」の新しい試み－文教ペンギンルームと看護学科のコラボレーション－．2016.8.

⑦ 川端愛子・小田進一・後藤　守・後藤広太郎・植木克美・中島 平・渡部信一：これからのインクルーシブな保育実践に求められる行動観察力- クリッカーを活用した保育者支援を通して-．東北・北海道心理学会第 12 回合同大会（福島大学）. 2016.10.

⑧ 川端愛子・片倉裕子・植木克美・後藤守：ICT を活用した保育支援に関する方法論的検討．日本保育者養成教育学会第 1 回研究大会（白百合女子大学）．2017

⑨ 後藤　守・後藤広太郎・川端愛子：インクルーシブな保育実践に求められる保育者像に関する研究．日本保育者養成教育学会第 1 回研究大会（白百合女子大学）. 2017.3.

⑩ 後藤　守・後藤広太郎・川端愛子・植木克美：インクルーシブな保育に求められる保育者の特性－へき地保育所の保育者が描くこれからの保育者のイメージ－. 2017.3.

６．研究組織

(1) 研究代表者
後藤　守（ GOTOH,Mamoru ）
研究者番号：00002478
北海道文教大学・人間科学部・こども発達学科・教授

(2) 研究分担者
小田　進一　（ ODA,Shinicti ）
研究者番号： 20310104
北海道文教大学・人間科学部・こども発達学科・教授

(3) 研究分担者
川端　愛子（　KAWABATA,Aiko ）
研究者番号：　60584034
北海道文教大学・人間科学部・こども発達学科・講師